

発 達 10 (296~307)

- 座長 高木 和子・弓野 憲一
- 296 絵画ストーリーにおける理解と構成——理解・構成におよぼすタイトルの有無と提示様式の効果——
九州大学 ①丸野 俊一
山形大学 ②高木 和子
- 297 “ ”
——物語構成レベルと物語理解との関係——
- 298 顔の記憶における処理水準の影響
京都大学 吉川 左紀子
- 299 漢字の読みに関する研究—視覚的複雑性と意味への還元—
関西大学 小澤 敦夫
- 300 文記憶に及ぼす文脈の効果
九州大学 古城 和子
- 301 記憶における維持的リハーサルに関する研究(1)
——発声的リハーサルが再生・再認に及ぼす効果について——
愛知教育大学 神谷 俊次
- 302 係留刺激の残留効果(2)
北海道教育大学 木村 士郎
- 303 幼児の記憶におけるカテゴリ群化について
東北大学 佐藤 弘子
- 304 長期記憶の検索限界 静岡大学 弓野 憲一
- 305 命題判断に要する反応時間の分析
お茶の水女子大学 鈴木 泰子
- 306 イメージ喚起能力とイメージ価が想起量に及ぼす効果
九州大学 菱谷 晋介
- 307 JARAT FORM A の高・中・低得点群のイメージ結合性とM反応の分析
室蘭工業大学 馬場 雄二
296. 野村(関西大)より、材料を同時提示した場合にも予測—確認といった情報統合化が行われるのではないかという疑問に、情報過剰から統合化に無理が生じると思われるとの答があった。また多鹿(愛教大)の測度が再認のみでは不十分ではないかの意見に、物語より推論される項目を加える必要はあるとの返答があった。
297. 木村の“スキーマ”は日本語で何と言うかの問いに、理解のための処理の枠組というのが妥当するとの答があり、多鹿の“かたわもの”の上下群間に差がないのはスキーマに合わない処理がなされたためではないかの疑問に、直接そうとは言い切れないが、物語に特有な
- ものがあるかも知れないとの答があった。298. 丸野より、形態、意味条件を設けた理由について質問があり、S_sの意図的コントロールにより、ある程度処理内容の重みづけができるのではないかとの答があった。299. 長縄(職業研)の訓読の音読に対する優位性は、読みの意味の熟知度の差ではないかという意見に、その可能性について検討したい、北尾(大教大)の象形文字の漢字に対する学習の容易性は視的特徴差ではないかという意見に、そうとは言い切れないとの答があった。300. 小林(近大)の具体文の述語は抽象文に比べて、主語より推測され易いのではないかという間に、そのような傾向があるかも知れないとの答があり、また土井(奈女大)のSS—FF群の手がかりの性質が違うのではないかの疑問に、文中の構成要素と意味的に関連があるという点では共通していたとの答があった。301. 高木の発声(維持)リハーサルが妨害にならなかった原因は何かという質問に、発声中も積極的処理があったためと考えているとの返答があった。302. 高木の横軸は等間隔にし、縦軸は対数間隔等にすべきではないかとの意見に、前者は今回はあえてそうした、後者は従来の理論では説明できないデータなので等間隔としたとの説明があった。303. 藤田(奈教大)の練習において出力時になぜカテゴリを与えたかの間に、検索時にカテゴリ利用を経験することによって、記銘時にもそれをS_sが利用し得るのではないかと考えたからとの返答があった。304. 菱谷より、データへの曲線の当てはめの前に、その曲線を導出する理論モデルが必要ではないかの間に、そのような理論モデルを考案中で、シミュレーションを行うつもりであるとの返答があった。305. 使用材料は、日本人学生による標準化が必要とされるのではないかという意見に、頼まれた研究なのでアメリカでの分類をそのまま日本語に翻訳したものをを用いているとの返答があった。306. 小島(北教大)より、イメージの内容についてのプロトコルはとったかの質問に、S_sの内省はとってはいないが、どのようなイメージが形成されるかは、材料を標準化する地点で調べてあるとの答があった。307. 高木のTATの図版による物語作りの評価はどのような観点から行ったのかの質問に、1. 成就、2. 攻撃、3. 求護の3つの側面から行ったとの返答があった。

(高木和子・弓野憲一)